

校舎改修に伴った教室の大移動が12月の始めに控えている。今回の大移動は、簡単に言えば、校舎の東側から西側に移り、今使っているすべての教室が、使えなくなる。その反対に、移動先の教室は、床が新品同様に磨かれ、壁も塗り直し、黒板やロッカー、扉は新調されている▼7月の移動よりも大がかりな移動である。そんな大移動を2学期末、時間が限られている中で行わなければならない▼その大移動計画の概略を教頭が、職員に示した。不確定な要素もあるため、大きな修正の余地を残しての案だ。不確定な要素を確定させるために必要なのは、直接指導にあたる担任の先生方を中心とした職員の「現場感覚」と「知恵」▼会議終了後、担任の先生方が自発的に集まり、ミーティングが始まった。移動の動線、移動後の学習環境の確保、令和8年の夏の最終移動。すべてを鑑みて、最終案をまとめた▼その後、残れる教員すべてが校長室に来てくれた。共同体感覚満載のその最終案は、ほぼパーフェクト。わたしのすべての質問に根拠を持って答えてくれた▼このポジティブな状態をわたしは「阿下喜の底力」と呼んでいる。壁にぶつかった時に、目的論で前に進もうとする教職員集団は偉大だ。そして、そんな底力を持った学校は、阿下喜だけではない。しかし、2学期末に引っ越しで頭を抱えている学校は、多くはない。みんなでがんばるしかない。